

山形 昭の体育科（第2学年）研究計画

1 本研究の位置付け

私は、体づくり運動（多様な動きをつくる運動遊び）の領域において、遊び方を工夫しながら、**よい動きを体感し、心地よさを味わう子ども**を目指す。多様な動きをつくる運動遊びで身に付けさせるべき動きは以下の通りである。

- ・姿勢や方向を変えて、回る、寝ころぶ、立つなどの「体のバランスをとる動き」
- ・速さ、リズム、方向などを変えて、歩く、走る、跳ぶ、はねるなどの「体を移動する動き」
- ・用具をつかむ、回す、転がす、投げる、捕るなどの「用具を操作する動き」
- ・押す、引く、運ぶ、支えるなどの「力試しの動き」

また、ここでいう「遊び方を工夫する」とは、教師が例示した運動を基に、①動きを変える、②用具の数や使い方を変えたり、組み合わせを変えたりして、自分なりに（もしくは自分たちなりに）遊び場を工夫する、③競争したり記録に挑戦したりして楽しむことである。「よい動きを体感し、心地よさを味わう」とは、「前より速くなった」「前より高く跳んだ」などのよい動きを体感し、「いっぱい運動して楽しかった」「体を動かすと気持ちがいい」などの運動の心地よさを味わうことである。

近年、運動する子どもとそうでない子どもの二極化の傾向や子どもの体力の低下傾向が進んでいる。そのため、指導要領の改定により、「多様な動きをつくる運動（遊び）」が、新たに導入され、小学校低学年から充実した指導を行うことは、極めて重要である。そこで、文部科学省からの運動の例示を基に、どんな運動の場を設定し、どのような動きを子どもにさせようかと試行錯誤しながら教材を開発し、授業を展開してきた。〇〇パークや〇〇ゾーンというような、教師が子どもに身に付けさせたい動きを行う場を教師自らが設定し、その場で自由に運動させるような授業を展開している場合も多く見られる。すると、子どもは「やらされている」感じをもったり、「その場での運動に飽きた」「もっと別の運動がしたい」という気持ちをもったりして、運動意欲の低下にもつながっていた。そこで、運動の場を子どもに自由に工夫させる取組を行うが、子どもは与えられた用具を好きなだけ使うことが工夫であると考えられる姿が見られた。これでは、動きを獲得するまでの過程が有効に働かず、「単なる体を動かすおもしろさ」を感じさせるだけにとどまっていた。

この問題を解決するために、本研究では、教師が提示した様々な運動を基に、子ども自らがそれを組み合わせたり変化させたりして競争する場を工夫してつくる活動を通して、よりよい動きを体感することができるようにさせる。ここでいう「競争」とは、他者や他グループと早さや得点を競い合うだけの競争ではなく、自己や自グループ内で新記録を目指して取り組むことも競争として捉える。

まずは、基本的な動きを身に付けさせるために教師が提示した動きを、場づくりの中で繰り返しもち出せるような指導を構想する。ただ、提示された運動をそのままやるのではなく、子ども自らが設定する場面を設け、教師が提示した動きを自分の動きとして捉えさせる。さらに、競争という中で工夫させることにより、「もっと速く、もっとうまく動きたい」と子どもは本気になって運動に取り組むことにより、よりよい動きを引き出させることができる。以上のことから、遊び方を工夫する場面において、条件の制限や競争を通して、子ども自らが動きを引き出させる場づくりの工夫ができるような指導過程を組んでいく。そうすることで、子どもは、よい動きを体感し、運動の心地よさを味わうことができる。この姿になった子どもは、基本的な動きを身に付け、さらには生涯にわたって運動に親しみ、運動を実践していくための基礎的・基本的な資質や能力を育てることにつながると考える。

2 主張する働き掛け

どの子にも抵抗感がなく、意欲をもてるものにするのはもちろん、単用の後半では「遊び方」を工夫しやすくするものであり、かつ効果的に基本的な動きを身に付けられる運動を提示する必要がある。そこで、身に付けさせたい動きを練習する場をいくつか設け、各々の場で動きを一つずつ確認しながら運動し、動きの基礎感覚づくりを行う。最初は、動きがぎこちなかったり、様々な動きが組み合わせられたような動きができなかったりした子どもだが、ここでの運動によりある程度なめらかな動きを身に付け始める。そこで、バラバラに取り組んでいた場を例示した運動から一つを教師が選び、リレー遊びをしたり発表会をしたりして試しの競争をする場面を設定する。その後、子どもに「もっと楽しい遊び場をつくって競争しよう」と投げ掛ける。すると、子どもは「**どうしたら楽しくなるのだろう**」と問いをもつ。そのような子どもに次のように働き掛ける。

働き掛け1

条件（用具や運動の種類，ルール）を最低限に限定して，競争させる。

「どうしたら楽しい遊び場が作れるのだろう」と問いをもっている子どもに，例えば用具なら1つだけと，条件に限定を掛けた場を与え，そこで運動させる。すると子どもは，限られた場の中で楽しくするにはどうすればよいかと試行錯誤し，教師が提示した基礎感覚づくりの運動を基にして，「動き」を変えようとっと違う運動ができるのではないかと「動き」に着目する。そして，変えた動き方を十分に味わわせると「動きを変えようとっと違う運動ができて楽しい」ことを実感する。

動きを変えて楽しくなったことを実感した子どもは，既習の経験を視点に，もっと違う条件を場に使用し，「動き」と「場づくり」とを組み合わせたらもっと楽しくなるのではないかと類推して考える。そこで，次のように働き掛ける。

働き掛け2

新しい条件を加えて，競争させる。

「動きを工夫すると楽しくなる」と考えている子どもに，例えば用具をもう一つだけ与えるなど，限定していた条件に新しい条件を加えて場づくりを行わせる。すると，子どもは新しい条件に合わせて動きを工夫する。2つの場づくりと基礎感覚づくりでの運動経験を基にしたその場に合った動きにより，組み合わせという工夫ができる。様々な動きと場の組み合わせを試しながら何度も運動を繰り返すと，「こっちの組み合わせの方がうまくいく」「こっちの方が楽しい」と組み合わせを比較しながら，動きと場を考える。これにより，新たな動きを経験し，動きのレパートリーを増やしていくことができ，「場を変えると動きが変わって楽しい」と実感する。

動きの工夫や場の工夫の仕方が分かり，動きのレパートリーが増えた子どもは，その限られた条件での遊び方ではなく，もっと自由に遊び方を工夫したいと考える。そこで，次のように働き掛ける。

働き掛け3

一定の条件下で，自由に「動き」と「場づくり」を行い，競争させる。

動きに着目し，動きのレパートリーを増やした子どもに，様々な用具を提示し，自由に使わせる。ただ，全ての条件をなしにして自由に場づくりを工夫させると，子どもは，用具をできるだけたくさん使うなど，用具にばかり着目し，身に付けさせたい動きではなく，目的をもたない動きの場づくりを行ってしまう。そうならないように，ルールなどの一定の条件は残しつつ，それ以外の部分で自由に工夫させる。すると，その条件内で楽しく競争するにはどうするかを考える。「○○という動きをしたいから，△△を取り入れよう」「△△を取り入れると○○という動きができるのではないかと試行錯誤し，その「動き」や「場づくり」を何度も試す。「より速くする（より高くする，より遠くする，より記録を高める，より楽しくするなど）ためには，どうしたらよいか」と考え，**推量する思考の方法**を使って，**「基礎感覚づくりでの動き」や「場づくり」の既習事項をもち出し，「動きや場を変えると運動が変わって楽しくなる」ことと結び付けることで遊び方が工夫され**，そこで運動することにより**比較する思考の方法**を使って「前より速くなった」「前より高く跳んだ」などと自分のよりよい動きを体感し，運動の心地よさを味わう。

3 検証

(1) 検証すること

- ① 想定した思考の方法を促す働き掛けにより，既習の経験をもち出させることができたか。
- ② 想定した思考の方法を促す働き掛けにより，目指す姿になったか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け3において，子どもは基礎感覚づくりでの動きや働き掛け1，2で示した運動を生かした工夫ができたかを子どもの様子と学習カードの記述から判断する。
- ② 働き掛け3で，よい動きを体感し，心地よさを味わったかを子どもの様子と学習カードの記述から判断する。

4 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業(6月) 「体を移動する運動遊び・体のバランスをとる運動遊び」(5時間)
- (2) 中間検討会(9月) 「力試しの運動遊び・体を移動する運動遊び」(5時間)
- (3) 初等教育研究会(2月) 「用具を操作する運動遊び・体を移動する運動遊び」(5時間)